



高橋玄洋氏

作家

1929（昭和4）年島根県生まれ。少年時代を広島県尾道市で過ごす。早稲田大学卒業後は放送作家として数多くの人気ドラマの脚本を担当する。また、小説や随筆を手掛けるなど作家としても多数の著作を持つ。長編小説として、飛行場を擁した時代の所沢を書いた『人工樹林』がある。過去には所沢市民憲章の起草委員長を務め、市民主体での憲章の制定に大きく貢献した。

住み始めた頃の所沢

私が所沢に移り住んできたのは、1959（昭和34）年、30歳の頃でした。

当時の所沢はアメリカ西部の街のようで、風が吹くと土が舞い上がる、埃っぽい所だった記憶があります。

最初に住んだ場所は、新所沢駅前の第一団地でした。その頃は、新所沢駅の傍らには団地以外の建物はなく、街の様子は今とはだいぶ違いましたね。

当時はテレビ局に勤め始めたばかりで、仕事の都合的にも東京に通える所沢を候補に選んだつもりでしたが、所沢の最初の印象は、「東京から遠いな」というものでした（笑）。

住まいは鉄筋コンクリート造りの庭付きテラスハウスで家賃は6千円だったと思います。その前に住んでいた杉並の部屋は、同じ家賃で半分程の広さしかなかったので驚きました。その生活環境の良さから、当時は公営団地は人気が高く、入居にあたっては収入制限や抽選をクリアしなければならず、私も他に神奈川の部屋など何回か応募した覚えがあります。

市民憲章

所沢市民憲章の草案を書いたのは、昭和の終わり頃、私が所沢に住み始めて30年ほど経った年でした。1986（昭和61）年6月、市民有志による「市民憲章をすすめる市民の会」が作られました。当時の青年会議所のメンバーらが中心となり、所沢の

シンボルとなるようなものを目指して作成に取り組み、そこで出たたくさんの方の思いを書き手である私が預かり、大きく3つの柱にまとめました。市民を中心に発案された案が、市に提言され採用されたことはとてもユニークな流れだと思います。全国的にもこうした市民目線で作られた市民憲章というのは、とても珍しいものです。

飛行場があった時代の所沢

著書『人工樹林』では、私が所沢に来るよりもさらに昔、所沢に飛行場があった時代の物語を書きました。私たちの世代にとっては、所沢は軍の飛行場があった「軍都」というイメージが強くあります。当時のことを調べるにつれ、飛行場や軍隊が人々の生活にとっても身近な存在だったという事実と、翻弄されながらも共存していたであろう人々や街の様子を知ることができました。

戦後、軍都というイメージは薄れ、街の性格は徐々に変わっていききましたが、一定の年齢以上だと、所沢というとまだ基地がある街というイメージを持つ方も多いでしょうね。

今の時代の先を見据えて

よく「10年ひと昔」なんて言いますが、この世は“流れ”であり、人間の生き様や社会の流れなどはそのくらいの単位で見ないと、その時代が良かったか悪かったかだなんて分かりません。

現代はインターネットなどでも情報が溢れ、世の中が少しギスギスしているように感じることがあります。しかし皆が、物事を長い目で見て、損得を考えずに周囲に手を差し伸べられるような、他者から尊敬される人間を目指して生きていけば、厳しい世の中でもお互いの思いやりで良い方向に回っていくようになるのではないのでしょうか。

<p>所沢市民憲章</p> <p>所沢市は武蔵野台地の自然に恵まれ、鎌倉街道の拠点として発達し、日本人が初めて大空にはばたいた記念すべき街であるこの歴史と環境の上に立ち、未来に向かって、うるおいの文化都市をめざす</p> <p>人は市の誇りである、このころのふれあいを求め、友情の輪をひろげよう</p> <p>恵まれた自然はいのちの泉である、みどりを守り、やすらぎの街を創ろう</p> <p>こどもは市の宝である、胸深く刻まれるふるさとを伝えよう</p> <p>所沢市は市民のため、一人ひとりが自らまちづくりを進めよう</p> <p>昭和六十二年三月制定</p>

市民憲章とは、市民一人一人が人の和とふれあいの心を大切に、所沢を明るく住みよまらなしようと、1987（昭和62）年3月に制定されたものです。物質的な豊かさから精神的な豊かさへの人々の意識の変化を背景に、市民有志の手で草案が作られました。この憲章の理念として最も基本となるのは、①人の大切さ②自然の大切さ③子どもの大切さを謳い、市民の生活規範として守っていくという姿勢です。

識者が見た所沢。

所沢はどんな街

私が所沢に越して来た1980年頃は、所沢は「明るい街」という印象がありました。西武ライオンズ球場や航空公園、新所沢パルコなど周りの町にはない新しいものが、どんどん作られる…所沢は若々しい街なんだな、と感じていました。

社会科の先生の影響もあり、広報ところざわを熟読するような小学生だったのですが、80年代中頃は西武鉄道の地下化や「夢ではない百万都市」というワクワクする言葉が紙面を飾り、実際に人口も年間に1万人ずつくらい増えていたように記憶しています。本当に無限に発展していくイメージでした。

90年代に入り川越市内の高校に通うようになりましたが、その頃から所沢と川越の市街地は異なる方向に歩みました。所沢は銀座通り沿いにタワーマンションを林立させ、古い町並みを変身させました。一方で川越は、歴史的な資源に着目してまちづくりのルールを作り、蔵造りの町並みを徐々に復活させ、観光地化していきました。

両市の在り方は対極ですが、所沢は景観を壊したものの定住人口を増やしたとも言えるし、川越は交流人口は増やしたけれども観光公害が目立つようになりました。

現在の郊外都市

1970年代から80年代にかけての急激な人口増加の影響を受け、現在の郊外都市、特にニュータウンには様々な問題が集積されています。かつて若々しかった所沢でも高齢化の

藤村龍至氏

東京藝術大学美術学部建築科准教授
／建築家、RFA*主宰

1976（昭和51）年東京生まれ。当市椿峰ニュータウンにて育つ。建築設計やその教育、批評に加え、公共施設の老朽化と財政問題を背景とした住民参加型のシティマネジメントや、日本列島の将来像の提言など、広く社会に開かれたプロジェクトも展開している。



波が押し寄せています。

埼玉県中部にある鳩山町では、人口の半分が鳩山ニュータウンに住んでいます。高齡化率が50%を超えるなど状況は先行しています。町では今、ニュータウンの再活性化に力を入れており、2017年には地方創生の交付金を活用して商業施設の跡地に「コミュニティマルシェ」という公共施設を作りました。ニュータウンの将来に関わると思ったので、私の事務所を手を上げ、管理運営を受託しています。

私は現在は東京在住ですが、今も椿峰のニュータウンの実家に母が暮らしており、たまに帰省します。椿峰ニュータウンも高齡化が進んでいますが豊かな環境があり、若い世代も少しずつ流入しています。2018年には若い子育て世代のママさんたちが中心になって、ニュータウンの公園を使って「つばきの森のマーケット」が開催されました。新しい住民の方々と交流していると交流空間や仕事をする場所が足りないと感じることもあります。

かつてはベッドタウンと呼ばれ、ニュータウンは夜に寝に帰る場所でしたが、もう少し新しい生活像が欲しいところです。徳島県の神山町では、大容量の光ファイバーを引いてネット環境を整備し、「川に足をつけながらパソコンを開く」イメージが流通しました。そういった「絵」が1枚できると、郊外ニュータウンのイメージが変わりそうです。

先述した鳩山ニュータウンでも、鋳金作家の方が結婚され出産を期に海外から戻ってくる際にアトリエを

求め移住してくるなど、子育てしながら創作活動をしている芸術家たちが何組もいます。そういう方々のライフスタイルが発信され出すと、見え方も変わってくるでしょう。

所沢のこれから

東京近辺の郊外都市では、一度都内に出た世代が少しずつ戻り、新しいカルチャーが出て来ているように思います。所沢でも空き店舗をリノベーションして個性なお店を出すなど、新しい動きが見られます。また西武線沿線は「トキワ荘」以来、漫画家やアニメーターの方も多く住んでおり、隠れたポテンシャルだと感じています。

所沢は狭山丘陵があり、身近に深い緑があるというのは一つ大きな特徴なので、緑をインフラとして捉え、新しい郊外都市生活の「絵」を示したいですね。ただし重要なのは、現役世代を巻き込み、新しいライフスタイルを示すことです。空家や公共空間を少しリノベーションして、緑に囲まれた、アトリエ付住宅やシェアオフィスにしてみるとか。先行事例が出れば、追随する人も出てくるかもしれません。そうしたヒントになるようなプロジェクトを、まずは椿峰でやっていきたいと思っています。建築を通じて、郊外都市のイメージを変えていきたいですね。

* RFA…藤村氏が代表を務める設計事務所 (ryuji fujimura architects research for architecture) の略称。